

# 健康科学大学と富士河口湖町との地域連携活動 について（平成24年度）

地域連携推進委員会

坂本宏史 佐藤真一 小林一彦  
瀧口綾 成田崇矢 大瀧雅世 小林純子

## Collaborative activities of Health Science University with Fujikawaguchiko town in 2012

SAKAMOTO Hiroshi, SATO Shinichi, KOBAYASHI Kazuhiko,  
TAKIGUCHI Aya, NARITA Takaya,  
OTAKI Masayo, KOBAYASHI Junko

### 抄 録

大学の知的財産を地域と共有することと大学生の実践的教育の場を拡大することを目的に健康科学大学（本学）と、富士河口湖町との間で「包括連携協定」が締結されて3年目を迎えた。

この報告では、平成24年度に本学が行った地域連携活動を振り返り、「地域連携協定」に基づいて到達度を総括した。

今年までに試行的に始まった事業のうち、河口湖畔の清掃活動を行うウォーク・クリーニング隊や、本学の教員が講師として、地域住民に向けて行う地域連携講座は、順調に実施され、定例的な事業となりつつある。しかし、昨年開講した「地域連携の理論と実際」の受講者が今年度は極端に減ってしまったこと、遊休農地活用事業を学内や地域に浸透させ、広げること等、いくつかの課題も生じている。

一方、今年度大学の文化祭と富士河口湖町誕生祭が、本学キャンパスで、合同で行われるなど、大学と富士河口湖町の連携の新しい方向性を見ることができた。

キーワード：地域連携

包括的連携協定

ボランティアセンター

大学の役割

## 1) はじめに

大学にある知的財産を地域と共有すること、大学生の実践的教育の場を拡大することを目的に、富士河口湖町との間で「包括連携協定」が締結されて3年目を迎えた。

連携に関わる活動も、試行から定例的な事業へ移行したものがあつた。一方で、今年度いくつかの課題も生じている。

この報告では、平成24年度に本学地域連携推進委員会が関わつた活動を振り返り、「地域連携協定」の目的に基づいて、到達度を総括したい。

## 2) ボランティアセンター

昨年度、大学内の専用の執務室に専属の職員を迎え、本格的に始動し始めたボランティアセンターでは、今年度も、ボランティア活動や大学と地域の連携の窓口としての役割や、ボランティア情報を「ボランティアNEWS」として配信する業務が継続された。

また今年度は、ボランティア活動を通して社会経験の幅を広げ、自身の成長の機会にすることを目的として開講した授業科目（ボランティア活動の実際）や、ボランティア



図1の写真(a, b, c, d)は学生ボランティア活動の様子。

a: 河口湖駅前、二輪車盗難防止キャンペーンで。4月

b: ウルトラトレイル・マウントフジ、河口湖畔で。5月

cとd: ウォーク・クリーニング隊

活動に参加することを履修条件に課した授業科目（山梨の自然と文化・産業）の受講者を中心にボランティアセンター登録者が増加することが予想されたため、4月、全学生を対象に「ボランティア登録者のオリエンテーション」を行った。このような過程を経て、以前からの課題であったボランティアセンター登録者数の拡大が、一挙に解消された。来年度の富士山の世界文化遺産登録を目指し、富士河口湖町役場とまちづくりワークショップとの連携で行なわれたウォーク・クリーニング隊をはじめ、様々な河口湖畔の清掃活動にも、多くの学生ボランティアが参加した。（図1）

### 3）富士河口湖町・健康科学大学地域連携講座

本事業は富士河口湖町と大学が共同で企画する、地域連携事業の大事な柱の一つであり、本年度で4年目を迎えた。

今年度は7月14日（土）と10月21日（日）に、それぞれ、富士河口湖町役場コンベンションホールと健康科学大学B101講義室を会場に開催された。

第1回〔7月14日（土）開催〕は、「息苦しさはとしのため？」と題して、基本的な呼吸器の構造の講義に続いて、呼吸器の疾患や喫煙の有害性についての講座を開いた。この回は、富士河口湖町の老人大学の講座を兼ね、200名を上回る参加者があった。第2回〔10月21日（日）〕は、今年度初めて大学文化祭・富士河口湖町誕生祭を合同で開催した際に、大学と町の共同の企画として行われた。富士河口湖町健康増進課の職員



図2 写真（a-d）は講座の風景である。  
aは本年度第1回（7月）、b-dは第2回（10月）の様子。

(渡辺保健師)と町内の糖尿病専門医(小館氏)を迎え、90名余の参加者を得た。町で行っている健康診断の結果から明らかになった町民の高血糖値傾向に着目し、糖尿病についての基礎知識を専門家から学び、町民の血糖値の改善のために、行政、診療所、大学がそれぞれに、あるいは共同で、何ができるかについて意見交換を行った。今後さらに意見交換会や学習会を続けることを確認した。(図2)

#### 4) 地域連携の理論と実際

昨年度開講した本講義は、本学に地域行政の専門家である富士河口湖町の職員を講師に招いて、「行政全般」、「福祉」、「文化」、「健康増進」などにかかわる町の取り組みや課題を紹介してもらうものである。受講生は4回の講義を聴いて、特に興味をもった課題について、グループをつくり、必要に応じて町役場職員や担当教員の指導を受けながら、調査・研究を行い、最終的に研究発表会を行った。

二回目を迎えた今年度は、受講生が極端に少なかった(4名 福祉心理学科)。

#### 5) 遊休農地活用事業

昨年度から始まった本事業は、昨年とほぼ同じ体制〔NPO「だんだん」、富士河口湖町役場職員ボランティア、本学ボランティア学生および職員〕で行われた。

今年度は、小麦やポップコーン用のコーン(爆裂種)を育てて収穫し、脱穀や製粉をしたうえで、授業(基礎作業療法実習)で山梨の郷土料理の「ほうとう」の材料としたり、富士河口湖町の食育祭りでは、「変わりたこ焼き」(たこの代わりに地域の特産のソーセージを使用)の材料としたり、また富士河口湖町誕生際・大学文化祭の際にはポップコーンの材料に用いた。耕作地の準備から種まき、収穫、調理などに関わった学生は、農作物が、日ごろ馴染みのある食品になるまでの一連の過程で、大変貴重な経験ができたと思う。

また、大根など農作物の一部は町内の特別養護老人ホーム・高齢者住宅で利用してもらった。(図3)

#### 6) 富士河口湖ボランティアネットワーク協議会

平成22年度発足した本協議会(構成:本学ボランティアセンター、富士河口湖町政策財政課・生涯学習課、社会福祉協議会、富士河口湖高校ボランティアサークル、河口湖畔教職員組合)は、本年度も4月から月に一度開催された。大学と町に、小中高等学校の連携によって生まれる利点や可能性について情報や意見の交換を行っている。前述の遊休農地活用事業も昨年6月の本協議会が発端であった。

#### 7) 考 察

富士河口湖町・健康科学大学地域連携講座

4年目の今回は、例年以上に企画に時間を費やしたため、7月までに日程のすべてを



図3 写真（a-e）は、事業の様子である。

a：事業初日の記念撮影。昨年6月

b：コーンと野菜。今年7月

c：小麦の収穫。今年7月

dとe：食育祭りで。今年9月

終了できず、後半を10月に開催することとなった。7月の連携講座では、社会福祉協議会の協力で富士河口湖町の老人大学の本年度第一回目の講座をかね、講座開催の決定から間もなくであったにもかかわらず、200名を超える多くの受講者が得られた。連携講座

のニーズを再確認できた企画となった。

10月に開催された連携講座は、今年度初めて富士河口湖町の誕生祭と本学の文化祭が共同で、しかも本学で開催されることにちなんで行われることとなった。講座の開催を通して、講師を務めていただいた、町役場の健康増進課職員の渡辺保健師、町内で開業されている糖尿病専門医の小館医師、本学教員の間に、「地域住民の健康増進」という課題に協力して取り組む体制づくりへ向けての足掛りができたと思われる。

### 地域連携の理論と実際

本授業科目は、地域行政の専門家が特別講師として、地域行政の現場で関わる「医療」、「福祉」の実態や課題について講義を行う、大変ユニークなものである。本学の学生が、学科を問わず、それぞれの専門に応じて地域医療の実情を学べる稀な機会である。

昨年度の受講者が16名、今年度は4名と少なく、受講者を増やすことが大きな課題である。この件に関して連携推進委員会で検討したところ、本科目の履修上の分類に、作業療法学科および理学療法学科の学生が受講しにくいという問題が明らかになった。この問題を解決するため、教務委員会を通して、科目の分類の変更を依頼して、来年度からは、全ての学科の学生が、選択しやすくなるように調整中である。また、学生に本講義の価値を理解してもらえよう、履修ガイダンスの折に説明をしていきたい。

### 遊休農地活用事業

地域と大学の要望が上手く合致した事業であると思われる。今年度、「自分のところの畑をこの事業に利用して欲しい。」という声も聞かれ、二年目を迎えて地域の期待や反響も感じられた。

今年度、農作物を学内の実習や、大学文化祭の折の出品材料として計画的に栽培したことや、町内の施設で施設の利用者、管理者、本学学生と一緒に農作物を利用して調理しながら交流できる試みがなされたことは、遊休農地活用事業の新たな必要性を開拓することとなった。

より多くの学生の興味ひいて、参加してもらえよう努力したい。

### 富士河口湖ボランティアネットワーク協議会

前述したとおり、本連携に関係する事業の多くのことがこの協議会において計画されてきた。独創的な企画も提案され、各事業への迅速な対応も可能な体制である。

一方、協議会構成員と所属する組織との情報の共有が不十分であることが、課題として指摘された。対策の一つとして、年一回、それぞれの所属する組織から、幹部関係者を招き、事業報告会を開催することが提案され、平成25年2月の開催を計画中である。

## 参考文献

---

地域連携推進委員会 石黒友康 他：富士河口湖町との地域包括連携における大学の役割，健康科学大学  
紀要 Vol. 7, 35-49, 2011.

地域連携推進委員会 坂本宏史 他：健康科学大学と富士河口湖町との地域連携活動について（平成23年  
度）健康科学大学紀要 Vol. 8, 129-138, 2012.

## Abstract

Three years have passed since an agreement was reached on the collaboration between the town of Fujikawaguchiko and Health Science University. The aims of the agreement are to share the university's intellectual property with the local people and to expand the opportunities in practical education and experience for the university students.

The current study reviews the collaborative activities in 2012 and evaluates the attainment levels of the aims.

Some projects—for example, lectures for the locals and the walk cleaning project—have been implemented quite successfully and have become regular activities. However, some measures to challenge raised issues such as the decreased number of participants for the lectures should be taken. Recently, the joint festival between the university and the town of Fujikawaguchiko was held on the university's campus, which is believed to provide new directions for the future collaborations.

Keywords : community collaboration

agreement on community collaboration

volunteer center

roles of university in community